

## 1 学校教育目標

# 「なかよく かつこよく みんなで 未来へぐん！」

～学びに向かい 人とつながり 未来を拓く児童の育成～



「なかよく みんなで」⇒多様な人とのつながり、協働することができる

「かつこよく」⇒よりよく生きる方法を考え、自分を見つめることができる

「未来へ」⇒自分も幸せ、まわりも人も幸せ…そのような未来を創ることができる、そのような社会の形成者として必要な資質や能力を身につける

「ぐん！」⇒仲間との学びを通して成長すること、できることを増やすこと、力をつけること

### ◇目指す児童の姿

- ① まなびに向かう力 【設定した目標に向かって、最後まで粘り強く取り組み続けることができる】  
【自らすすんで創意工夫して、常に新しい学びを生み出すことができる】  
【振り返りによって改善点を見出し、積極的に次の学びへつなげることができる】
- 自分を② すきになる力 【自分の長所も短所も含めて、自分のことを受け入れることができる】  
【自分が努力してきたことについて自分のことをほめることができる】  
【自分の成長を確かめながら、困難なことや新しいことにも挑戦していける】
- ③ だれかとつながる力 【他者とのコミュニケーションを自らすすんでとることができる】  
【他者の良さに気付くことができ、その良さについて伝えることができる】  
【自分と他者との違いを受け入れた上でお互いに折り合いをつけることができる】

## 2 研究内容・研究主題について

### (1) 令和4年度以前の取り組み【1年次】

本校では、「なかよく かつこよく みんなで 未来へぐん！ ～学びに向かい 人とつながり 未来を拓く児童の育成～」を学校教育目標に掲げ、「学びに向かう力」「自分をすきになる力」「だれかとつながる力」（以下「ますだ力」）を児童一人ひとりに育むことを最上位目標として全職員で共有し、日々、指導を行っている。

令和3年度末より、「ますだ力」のそれぞれの視点に沿って「卒業時の姿」を具体的に設定し、「卒業時の姿」に至るまでに、それぞれの学年でどの段階まで達成しておくべきかを「各学年修了時の姿」として定め、全職員で共通理解を図った。

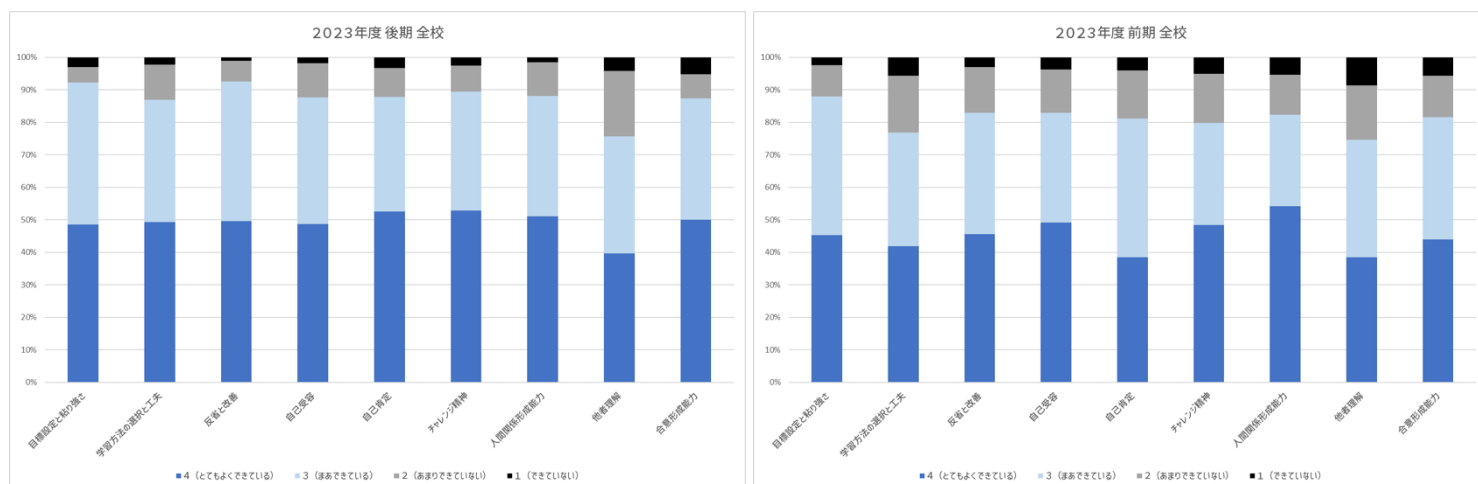
令和4年度より、児童の「ますだ力」育成のための手段として、特別活動を研究の中心に据え、実

践に取り組んできた。具体的には、令和3年度までに本校で取り組んだ、問題を見出し、児童と共に学習計画をつくりあげていくという「学びのプラン」の学習過程を、特別活動における「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」の一連の活動に応用し、実践を積み重ねていった。とりわけ、学級活動の実践を通じて、指導方法や話し合いの仕方の共通理解を図るとともに、「学校教育目標」をもとに、教師と児童、保護者の3者の思いを踏まえたうえで各学級の「学級目標」を設定し、その達成のために児童一人一人が個人目標を設定し、年間を通じて追求していく活動を重点的に行った。学期末には、「各学年修了時の姿」に関わるアンケートを実施し、それぞれの学年の児童の「ますだ力」がどの程度達成できているか、調査を行った。アンケートの結果、年間を通じて「ますだ力」の「目標設定と粘り強さ」の項目と「合意形成能力」の項目において改善が見られた。その一方で、「学習方法の選択と工夫」や「自己受容」、「自己肯定」の項目については、大きな改善が見られなかった。その要因の一端は、各教科の指導方法の在り方にあると考えた。我が校児童の大半は、授業が「分からない」「どうせできない」「つまらない」と感じており、このような風土が上記3項目の数値の低さに現れたのではないかと推察したのである。そこで、令和5年度は、学級活動同様、各教科においても「もっと知りたい」「できるようになりたい」「自分たちの手で解決したい」と思うことができるように、授業改善を図ることとした。

## (2) 令和5年度の取り組み【2年次】

令和5年度は、学級活動における「問題の発見・確認」「解決方法等の話し合い」「解決方法の決定」「決めたことの実践」「振り返り」という「一連の活動の流れ」を各教科の指導においても意識して実践を積み重ねていった。教科や内容の特性に応じて、児童の疑問をもとに学習計画をつくり、前時と本時、次時、単元目標など、それぞれのつながりを意識しながら学習を進めたり、単元計画を教師目線で組み立てるのではなく、児童の思考の流れに沿って単元構成を組み替えたりするなどの授業改善に取り組んだ。

この授業改善の取り組みにより、昨年度の課題であった「ますだ力」の「学習方法の選択と工夫」と「反省と改善」の項目において、児童の肯定的回答が大きく上昇した【資料1】。また、学級目標の追求や学級会の継続的な実施についても、前年度より引き続き取り組んだところ、前期より肯定的回答が多かった「目標設定と粘り強さ」と「人間関係形成能力」、「合意形成能力」の3項目において、後期では9割前後の肯定的回答を得るに至った。



しかし、依然として課題も見られる。「ますだ力」のうち、「他者理解」の項目については、年間を通じて8割未満のままであり、大きな改善は見られなかった。また、特別活動全般については、次のような課題が見られた。

- ① 年間指導計画に基づき、課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）として学級活動（2）を行う学級が少なかったこと。いわゆる児童の“問題行動”を未然に防止するのではなく、“問題行動”が起きたのちの事後指導に終始していた感が強いこと。
- ② 年間指導計画に基づいた指導がなされず、各学級の裁量によって学級活動の指導が展開されたため、本来、学級活動（2）で取り扱うべき題材も学級活動（1）の議題として取り扱われるようなことが多々あったこと。
- ③ 学級活動（1）の実施回数が学級によってまちまちであり、年間指導計画に示されている時数に満たない場合も散見された。
- ④ 児童会活動やクラブ活動においても、学校教育目標の達成に関わる充実した話し合いと実践を行うことができているとは言えない現状にあること。特に、クラブ活動については、活動計画の策定に一部の児童しか関わっておらず、下学年の児童の多くが決められた活動に参加するのみにとまっていること。

### （3）研究主題

以上の成果と課題を踏まえ、今年度の研究主題を以下のように設定した。

#### 【令和6年度 益田小学校研究主題】

#### 『ますだ力』のある児童の育成

～ 仲間とともに高め合い、よさを伝え合う特別活動の実践を通して ～

「ますだ力」の育成を目指し、学校教育目標を踏まえた学級目標の設定、ならびに学級目標達成のための個人目標の設定とその追求を基軸とし、集団における互いのよさを伝え合う活動に重点を置いて、特別活動の実践を積み重ねたい。

具体的には、学級のみならず、児童会や異年齢集団などの様々な集団の中で、学校教育目標を意識しながら見通しをもって実践を積み重ねていくことを通して、児童一人ひとりの「ますだ力」の育成を図っていく。とりわけ、「他者理解」（他者の良さに気付くことができ、その良さについて伝えることができる）の項目に弱みがあるという本校児童の傾向をふまえ、「よさを伝え合う」を研究のキーワードとした。多様な集団での活動の中で、仲間のよさを見付け、自分と仲間の考えや思いを共有する活動を充実させることで、他者と関わり、分かり合うことのできる人間関係を築くことの一助としたい。

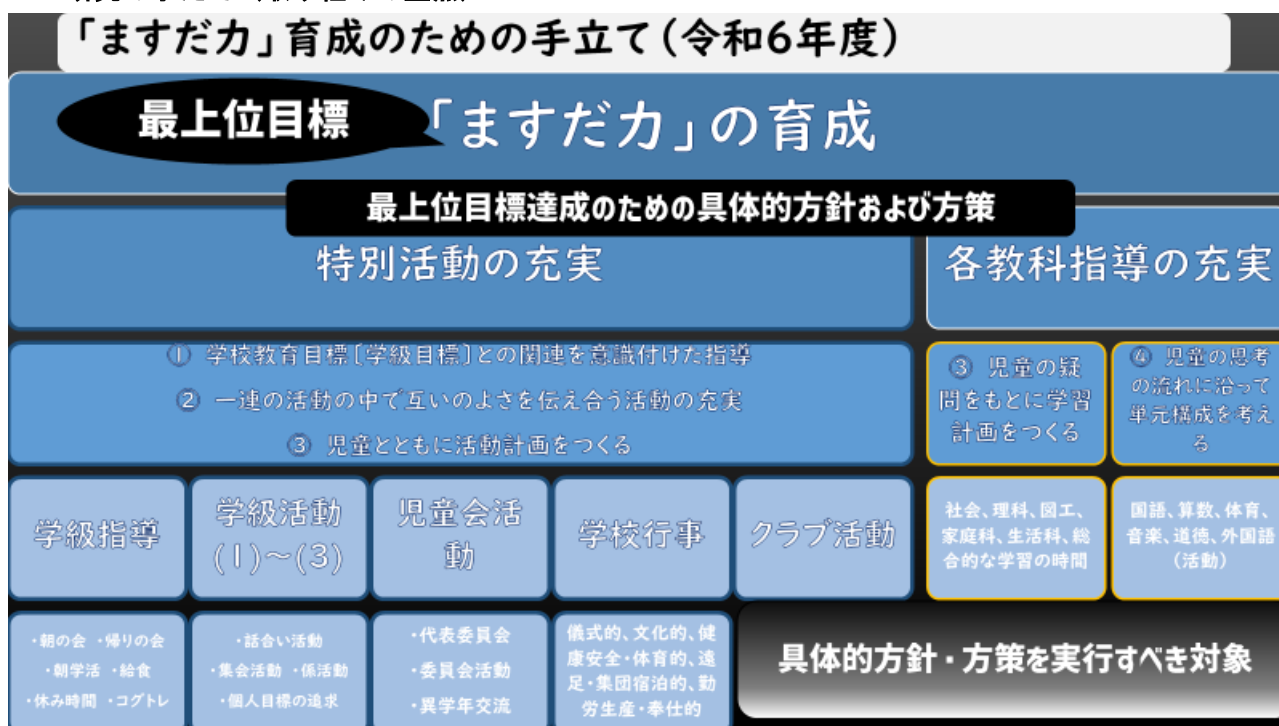
また、年間を通じて継続的に学級活動の実践を積み重ねていくためには、教師だけでなく児童も年間計画を把握しておく必要があると考える。そこで、学級活動（1）において、年間の学級活動の計画を児童とともに作成することを通じて、教師・児童がともに学級活動の見通しをもち、継続的によ

さを伝え合う活動を積み重ねていくことで、仲間と共に高め合いながら、よりよい集団へと成長することを期待したい。

### 3 研究仮説

年間を通して学校教育目標を踏まえた学級目標の設定、ならびに学級目標達成のための個人目標の設定とその追求を行うとともに、特別活動において、「問題の発見」から「実践の振り返り」までの一連の活動において、児童の問題意識を高め、集団の一員として自分ができることを「めあて」にし、自他のよさや頑張りを実感したり、共有したりできる「振り返り」の実践を積み重ねることで、児童一人ひとりの「ますだ力」を育成することができるだろう。

### 4 研究の手だて（取り組みの重点）



#### (1) 「学校教育目標」と保護者・児童の思いを踏まえた「学級目標」の作成

一般的に、年度初めの学級は、児童相互の人間関係が希薄で、何かの目的をもって集まった集団ではない。教師は、このようなただの集まりから規律ある自治的な集団へと高めていく必要がある。学級が高まり合う集団となるためには、集団を形成している一人一人の児童が同じ目標を共有していることが重要である。そのために必要なのが学級目標である。

学級目標の設定について、平野（2021）は次のように述べている<sup>1)</sup>。

ただ学級目標をつくれればよいということではありません。大切なのは、目標に対する個々の思いであり、設定までのプロセスです。出来上がった目標は、一人一人の学級の子供の思いや担任の思いを反映したものでなくてはなりません。そのためには、目標設定のプロセスを丁寧に行う必要があります。

すなわち、学級目標は担任の思いだけや子供だけで話し合わせてつくるものではないということ

ある。学級の主たる生活者である児童の思いに加え、その保護者の願い、そして教師、三者の願いのすり合わせによって決めていかなければならないのである。このようなプロセスで学級目標を決めることで、学級経営目標、ひいては学校教育目標との整合性をとることも可能であろう。本校でもこの考え方をもとに、三者の願いを踏まえて今年度も学級目標を設定していく。

また、集団目標である学級目標によって、集団の中に個が埋没し、個が尊重されないような学級にならないようにする必要がある。そのために、児童個々の意思決定を大事にしたい。学級目標（集団目標）は、あくまで学級全体として目指していく方向性を示したものであり、その目標達成のためのやり方は、一人一人の児童に任せるということである。学級目標を設定した後は、目指す学級像に近づくために、何をするのか、何ができるのかを一人一人の児童が考え、決めて実践していく活動を行っていききたい。

## （２） 「学級目標」達成のための個人目標の追求

上述の通り、学級目標を設定したのち、学級活動（３）で学級目標を実現するための個人目標を設定する。設定しためあては、毎日、朝の会の時間に振り返る。月末には、朝活動の時間に1ヵ月取り組んだ様子を振り返り、担任の適切な助言をもとに次月のめあてを更新していく。

## （３） 児童とともに作る学級活動（１）年間指導計画

学級活動（１）を実施していく中で課題となるのが、「議題箱に議題がなかなか入らない」という点である。実際に昨年度の研修委員会でもそのような声が挙がっていた。年間を通じて継続的に学級活動の実践を積み重ねていくためには、教師だけでなく児童も年間計画を把握しておく必要があると考える。そこで、学級活動（１）において、年間の学級活動の計画を児童とともに作成する。具体的にはまず、児童と『学級会の計画を立てよう』という議題で話し合いを行う。そこでは「年間何回実施できそうか」や、「学校や学年の行事と見比べながら何月にどんな議題が良いだろうか」など、話し合うようにする。次に、話し合いで出された議題案を教室に掲示する。そして、実際に計画した時期になったら学級会と事後の活動に取り組む。その後、振り返りや活動の写真などの記録を教室に掲示し、児童の様子を蓄積していく。このようにすることで、児童も教師も見通しをもつことができ、活動回数や安定性の確保につながると考える。また、児童が活動の中で自他の良さを認識し、それを伝えたり記録として蓄積したりしていくことで、継続的にお互いのよさを伝え合えるようにしたい。

## （４） 年間指導計画にもとづいた学級活動（２）（３）の指導

学級活動（２）（３）も年間指導計画にもとづいて実施していく。これらの指導を活発にするために、ワークシートの形を全学年で統一し、学級の前に掲示して取り組みを可視化できるようにする。また、「つかむ」、「さぐる」場面では、ICTを効果的に活用していきたいと考えている。そこで、これまでの実践事例を研修委員会で紹介したり、ICT活用事業の授業研究会を通してより効果的な活用方法を考えたりしていく。さらに、学校図書館の活用という内容が年間指導計画の学級活動（３）に位置づいていることをふまえ、司書教諭とも連携を図りながら図書館活用の授業を行うことで、情報活用授業の素地を育てていくようにしたい。

## (5) 「よさを伝え合う活動」を意識した特別活動の指導

### 【学級活動（1）】

#### ① 「問題発見タイム（仮）」（朝活動・朝の会など）

話し合い活動の前に、提案理由について考えたり、情報を収集したりして、自分のめあてや考えをまとめるなど、議題について問題意識を高める時間を設けるようにする。それによって、学級の児童が、議題や提案理由について共通の認識をもって学級会へ参加できるようにする。

#### ② 「『いいね!』タイム（仮）」（朝学活・朝の会など）

学級会や決めたことの実践活動の後に、自分のめあてや活動について振り返り、「①自分のよかったところ」「②仲間のために行動したこと」「③学級（集団）のよかったところ」「④仲間への『いいね!』」の4つの視点でふりかえりを行う。「④仲間への『いいね!』」については、「いいね!カード」に書き出し、仲間に手渡すとともに、もらった「いいね!」は学級会ノートに貼付け、蓄積していく。なお、「いいねカード」を誰もがもらえるようにするために、ペアの良いところを見つけて書く、グループの良いところを見つけて渡すなど、事前に指定しておくようにすることで、仲の良い友だち以外の仲間の良いところにも目を向けることができるように配慮する。このように、仲間と自他のよさを共有する活動を設けることで、自他の成長を実感できるようにし、他者理解を深め、仲間や集団のために自分から行動できる児童を育成する。

### 【学級活動（2）（3）・児童会活動・クラブ・各行事】

#### ① 4つの視点による振り返り

前述の「『いいね!』タイム（仮）」で掲げた4つの視点の振り返りを学級活動のみならず、委員会やクラブ、各行事の後にも実践する。

#### ② 学校教育目標（学級目標）との関連を図ったワークシートの活用

委員会活動や各行事のオリエンテーションを実施し、それぞれの活動の目標を「教師の願い」として児童に紹介するとともに、それらに対する児童一人ひとりの思いやめあてを集約・分類し、学校教育目標（学級目標）との関連を意識付ける。それらの関連を示したものをワークシートに反映し、児童一人ひとりが個人目標を設定する。活動後には、先述の4つの視点で振り返りを行う。

## (6) 「主体的・対話的で深い学び」のための単元構成・学習展開の工夫

#### ① 学習課題・学習問題を意識した単元構成とその達成のための学習計画づくり

教師の適切な指導の下、単元をつらぬく学習課題・学習問題を導入で設定するとともに、それらに対する児童の予想や解決策をもとに、学習計画を児童と共に設定することで、児童が見通しをもちながら主体的に学習に向かうことができるようにする。

#### ② 必然性のある対話の場面の設定

ペアやグループでの話し合いや活動の場面を積極的に取り入れるだけでなく、児童が自分の考え

を伝え合いたくなるような発問をしたり，ゴールイメージを持たせたいうで対話活動を行ったりするなど，対話の仕方に必然性を持たせることで対話的な学習の実現を図る。

③ 次の学習とのつながりを意識した振り返りと評価

単元の節目で児童が学習過程を振り返るとともに，教師が評価を行う。児童の振り返りや評価をもとに，学習計画の修正をしたり，新たな問題へとつなげたりして，より深く学ぶことができるようにする。

(7) 「まずだ力」育成の基盤づくりとしての年間を通じた「コグトレ」への取り組み

本校児童の中には，問題解決能力や感情コントロールといった「社会面の力」を求められる場面で困り感を感じている児童が多くいる。これらは，感情のコントロール・自己肯定感・他者と協力できる社会的能力やコミュニケーション力などのIQなどでは測れない「非認知能力」が求められているということである。また，児童の姿からは学習の土台となる「見る力・聞く力・想像する力」が弱く，手先の不器用さや眼球運動などの身体的不器用さを感じることが多い。そこで「学習面」だけでなく，「社会面」「身体面」の3つの側面から児童の理解と支援が必要になる。そのため，今年度も本校では，“コグトレ”に取り組むこととした。学力や前述の非認知能力の土台となる認知機能の向上を目指すことで，子ども達が「なかよく かつこよく みんなで」を創っていく一助となると考える。

8 研究成果の検証方法

- (1) 調査方法…キャリアパスポートのアンケート項目による
- (2) 調査対象…第1学年～第6学年 計322名
- (3) 調査実施時期 10月上旬，2月下旬
- (4) 調査項目

調査内容を「ま…学びに向かう力」「す…自分を好きになる力」「だ…だれかとつながる力」の3項目に分類して実施する。

9 年間研修計画予定表 (※一部経験者研修等も含む)

月日	校内研修・公開授業等	備考
4/2 (火)	第1回研修職員会議	今年度の研究計画、方針についての研修
4/10 (水)	第2回研修職員会議	学級活動(1)に係る研修
4/19 (金)	学級活動(1) 授業公開 (6年・勝部)	学級目標設定に関する授業公開 (校内自主研修)
4/22 (月)	第3回研修職員会議	学級活動(1)、児童会活動に係る研修
5/1 (水)	能力開発研修 特別活動講座 学級活動(1) 授業公開 (5年・鈴木) 第4回研修職員会議	学級活動(1)に係る研修授業公開、研修 能力開発研修 特別活動講座に係る授業公開 研究協議

5/8 (水)	第5回研修職員会議	学級活動(1)、(3)に係る研修
6/4 (火)	第6回研修職員会議	ICT活用と著作権に係る研修
6/19 (水)	第7回研修職員会議	学級活動(1)、(2)、(3)に係る研修
7/3 (水)	第8回研修職員会議	ICT活用に係る研修
7/16 (火)	第9回研修職員会議	学力向上に係る取り組みについての情報交換会
9月(未定)	学級活動(1)授業公開(3年・和崎) 第10回研修職員会議	校内自主研修 研究協議
10月8日(火)	第11回研修職員会議	学力向上に係る取り組みについての情報交換会
10月16日(火)	第12回研修職員会議	学級活動(1)に係る研修
11月6日(水)	学級活動(2)授業公開(1年・須田) 第13回研修職員会議	ICTに係る授業公開 研究協議
11月(未定)	自立活動 授業公開(なお2組・澤江) 第14回研修職員会議	2年目研修に係る授業公開 研究協議
1月14日(火)	第15回研修職員会議	県学力調査結果分析並びに次年度対策検討会
1月22日(水)	第16回研修職員会議	児童が主体的になる授業づくり検討会
3月11日(火)	第17回研修職員会議	今年度の振り返りと次年度の研究について

## 参考文献

- 1) 安部恭子, 平野修, 清水弘美, 『楽しい学校をつくる特別活動』, 小学館, (2021).
- 2) 清水弘美, 『小学校版 子供の心を伸ばす 特別活動のすべて』, 小学館, (2020).
- 3) 橋本卓也, 『実務が必ずうまくいく 特別活動主任の仕事術 55の心得』, 明治図書出版, (2023).
- 4) 宮口幸治, 宮口英樹, 『社会面のコグトレ 認知ソーシャルトレーニング① 段階式感情トレーニング/危険予知トレーニング編』, 三輪書店, (2020).